

アンセルムスとアルヌルフス

矢 内 義 顯

序

本稿は、カンタベリーのアンセルムス (Anselmus Cantuariensis 1033/34-1109) の書簡⁽¹⁾を通して、ボーヴェーのアルヌルフス／エルヌルフス (Arnulfus/Ernulfus Belvacensis ca. 1040-1124) について述べるものである。

最初にアルヌルフスの生涯の概略を記しておく⁽²⁾。彼は1040年頃、北フランスのボーヴェー (Beauvais) に生まれ、若い頃ノルマンディーのル・ベック (Le Bec) の修道院学校においてランフランクス (Lanfrancus Cantuariensis ca. 1010-89) の下で学んだ後、ボーヴェーの聖シンポリアヌス修道院 (Sanctus Simphorianus) の修道士となる。1073年頃、彼はカンタベリー大司教ランフランクス (在位1070-89) に請われてイングランドに渡り、カンタベリーのクライスト・チャーチ (Christ Church) 付属の修道院学校の文法教師として、以後二十年間、教育に携わる。ランフランクスの死後、アンセルムスがカンタベリーの大司教 (在位1093-1109) になると、アルヌルフスは彼の全幅の信頼のもとに、1096年同修道院長となる。1107年にはイングランド中部にあるピーターバラ修道院 (Peterborough) の修道院長となり、ついで1114年にはイングランド南東部にあるロチェスター (Rochester) の司教となり、1124年その生涯を終える。彼の同郷人で教会法学者として名を馳せたシャルトルの

イヴォ (Ivo Carnotensis ca. 1040-1116) は、その書簡の中で彼を評して、「賢慮をもった敬虔な人」(vir prudens et religiosus) と評しているが⁽³⁾、このことは以下で述べることから明らかであろう。

1. 『書簡38』(ボーヴェーのアルヌルフス)

さて、アンセルムスはその生涯において、四百通以上もの書簡を執筆しているが、そのうちアルヌルフス宛のものとしては十五通が残されている⁽⁴⁾。その最初のもは、アルヌルフスがまだボーヴェーの修道士、アンセルムスがベック修道院の副院長であったときに書かれた『書簡38』である。以下にその本文を示す。

『書簡38』 修道士アルヌルフスへ

最愛の師にして兄弟アルヌルフスへ。兄弟アンセルムスが挨拶を送る。

会って語り合いたいと、貴兄が兄弟愛から切に願っていることについては、貴兄が聖なる修道生活に入ったときから、私も望んでいたことですし、今もそれを望んでいます。けれども、私は自分の思うままにできる身ではなく、またそうなることを望んでもいませんから、私たちが共に抱いている望みを実現することができませんでしたし、もしこの先それができるとしても、今のところは分かりません。そこで、時間も迫っていることですから、ご依頼の件については手紙で手短かに答えることにします。

貴兄が頼んできた若い修道士については、修道院長もまた私の兄弟たちも、まずこの修道士が長い修道生活の経験を積んで自分の人生が分かった上でないと、という理由で許可しませんでした。しかし、貴兄が、自分の企図に従って生活することができるような他の道を目指していることについては、賛成ですし、励ましの言葉を送ります。ただ、その場合でも、あらかじめ申し述べておきたいのは、貴兄の修道院長の許可を得てからそれを実行に移すようにという

こと、また、もし修道士としての報酬を得たいと望んでいるのなら、いかなる道であれ神が備えて下さった道を歩み、修道院長に服従し、我意の赴くままに任せず、規則に従って生活するように、ということです。貴兄が他の人々に役立つような、あるいは他の人々を教えるような場所ではなく、他の人々によって貴兄が進歩し、他の人々から霊的な闘いのための教えを受けることができるような場所を選んで下さい。つまり、教えることよりも、まず教えられることを貴兄が好むならば、着実に進歩するでしょう。加えて、もし、自分の企てた目的と、いかなる修練によってそこに到達すべきかを貴兄が熟慮するなら、貴兄がこの世を棄てた理由であった学校の学問に自分の生活を費やすことは、決して自分にとって益とはならないことが分かるでしょう。

貴兄の親密な愛情が私に向けられるように。この巡礼の旅路においては離れ離れになっている私たちが、たとえ路は異なっている、祖国へと向かうように。そして祖国においては共に神から永遠に喜びを得ることができるよう、お互いのために祈りましょう。

本書簡に先立つ、アルヌルフスからアンセルムスに宛てた書簡は残されていないが、本書簡の文面からその内容を推察すると、おそらく、彼はその書簡でアンセルムスにある依頼と相談をもちかけ、それについて、できることなら会って話したいとの旨を記したようである。これに対し、アンセルムスは、そうしたいのは山々だが、自分も修道士である以上、自分の思うままに振る舞うことはできないから、手紙で返事をすると言ふ。ここで幾つかの点を指摘しておきたい。

まず、アンセルムスが、「会って語り合いたいと、貴兄が兄弟愛から切に願っていることについては、貴兄が聖なる修道生活に入ったときから、私も望んでいたことですし、今もそれを望んでいます」と述べている点である。すでに述べたように、アルヌルフスはベックの修道院学校で学んだ後、故郷のボー

ヴェーに戻り修道士となる。彼が修道士となった時期を示唆するのが、この「貴兄が聖なる修道生活に入ったときから」という一文である。アンセルムスが生まれ故郷のアオスタを離れ、数年間の遍歴の後にベック修道院に到着したのは1059年のことである。それから四年、ランフランク스가カーンの修道院長として招聘され、ベックを離れるときまで彼はランフランクスの下で学ぶことになる。アンセルムスより六ないし七歳年下のアルヌルフスがいつベックに来て、ボーヴェーに戻ったかは分からない。しかし、この1059年から1063年の間にアンセルムスとアルヌルフスが共に机を並べた可能性もないことはない。少なくとも、アンセルムスとアルヌルフスとの間には、後者が修道士となる以前から何らかの形で親交が結ばれており、だからこそ、彼が修道士となったとき、アンセルムスは修道生活について彼と語り合うことを望み、またアルヌルフスも、後述するように、自分の人生の重大な決断の時期にあたって、アンセルムスに相談したのだと思われる。すると、アルヌルフスが修道士となったのは少なくとも、1059年以降から本書簡が書かれる前までのことである。本書簡の執筆時期は後述するように1073年以前であるから、1059年から1073年の十四年間のどこかで、彼は聖シンボリアヌス修道院の修道士になったことになる。しかも、次に述べる依頼の内容からして、本書簡が書かれた時期には、彼はすでにある程度の修道生活を経ていたとも考えられる。したがって、彼が修道士となった時期は60年代の前半と想定できるかもしれない。

次にこの書簡の本題に入ろう。その一つは、若い修道士 (*frater adolescens*) に関するものである。おそらく、アルヌルフスの属する修道院の若い修道士が、ベック修道院に移りたいとの希望を持ち、その許可を願ったのであろう⁽⁵⁾。この件に関し、アンセルムスは修道院長ヘルルイヌス (*Herluinus* ca. 995-1078) も修道士たちも、この修道士が「長い修道生活の経験を積んでいない」という理由から、受け入れを許可しなかったことを告げている。もちろん、修道士が自ら誓願を立てた修道院に留まるべきことは、ベネディクトゥスの『戒

律』が命じることであり⁽⁶⁾、アンセルムス自身の修道観もそれを堅持するものであることは、本書簡に先立つ『書簡37』からも明らかである⁽⁷⁾。なお、本書簡の仏訳者は、この若い修道士とはアルヌルフス自身のことであろうと述べているが、その推定には無理がある⁽⁸⁾。

もう一つは、アルヌルフスの一身上に関わる問題である。すなわち、アルヌルフスがその修道院を離れることについて、アンセルムスの判断を仰いでいることである。ここで、アンセルムスは「貴兄が、自分の企図に従って生活することができるような他の道を目指していることについては」と婉曲な表現をとっているが、具体的には、ランフランクスの懇請によってカンタベリー教会の付属修道院の修道院学校で教えるということである。1070年、カーン修道院長ランフランクスは英国王ウィリアム一世（William I 在位1066-87）の要請により、イングランドに渡り、カンタベリー大司教となる。そして、ランフランクスは時を移さずノルマン征服後の荒廃したイングランド教会の改革・再編成に着手し、教会会議の開催、教会法の適用、教会裁判所の設立、修道院生活の改革を行なう⁽⁹⁾。その一環としてカンタベリー修道院の若い修道士たちの教育の充実を図る。そのためには大陸から有能な教師を招聘することが必要となる。そこで白羽の矢が立てられたのが、かつて彼の下で学んだアルヌルフスであった。アンセルムスもこうした事情は十分に心得ていたに相違ない。それゆえ、修道士がその誓願を立てた修道院を離れることについては、たとえ「霊的な熱情」（*fervor spiritualis*）を動機とする場合であっても、極めて慎重な態度をとるアンセルムスも⁽¹⁰⁾、アルヌルフスのカンタベリー行きについては、「賛成ですし、励ましの言葉を送ります」と賛意を表明する。もちろん、事を実行するに当たって注意すべき点を、ベネディクトゥスの『戒律』に則して記すことは忘れない⁽¹¹⁾。さらに、修道士として学問に取り組む姿勢についても助言を与える。修道士にとって学ぶことは「霊的な闘い」（*spiritualis militia*）のためであって⁽¹²⁾、この点で世俗の「学校の学問」（*studium scholarum*）とは峻別さ

れるのである⁽¹³⁾。ここでアンセルムスは、「貴兄がこの世を棄てた理由であった学校の学問」と述べている。ランフランクスにしても、また同時代のペトルス・ダミアニ (Petrus Damiani 1007-72) にしても世俗の学校で教育に携わり、その後に修道士となっている。アルヌルフスにもそうした経歴があったのかもしれない⁽¹⁴⁾。

最後に本書簡の執筆年代について述べておく。シュミットおよびフローリッヒは共に本書簡の執筆年代を1078年以前とし、他方、次に取り上げる『書簡64』の執筆年代をシュミットは1077年以前、フローリッヒは1076年頃としている。『書簡64』の内容に照らすと、当然、本書簡はそれ以前に書かれたはずである。したがって、本書簡に関する両者の年代設定は奇妙であると言わざるをえない。アンセルムスの同意を得たアルヌルフスがボーヴェーからカンタベリーの修道院学校に移ったのは1073年頃であるから⁽¹⁵⁾、本書簡の執筆年代は1073年以前とするのが適切であろう。

次に『書簡64』を紹介する。

2. 『書簡64』（カンタベリーの教師アルヌルフス）

『書簡64』修道士マウリティウスへ

愛する兄弟にして子であるマウリティウスに。兄弟アンセルムス。

貴君がアルヌルフス師の下で学んでいることを聞きました。もしそれが本当なら、貴君自身が経験した通り、貴君の進歩を切に望んできた私にとっては嬉しいことですし、今ほどそれを望んでいるときはありません。アルヌルフスが文法の教授に非常に秀でていることも聞いています。また、貴君もご承知のように、子供に文法を教えることは私にとっては常に重荷であったし、そのために、私のところでは貴君が自分の役に立つほど文法に習熟しなかったことは私も承知しています。そこで、最愛の子に命じます。どうか、彼から手ほどきを受ける書物、あるいは他の仕方でも読むことができる書物すべてについて、でき

る限り勤勉に文法の復習をするよう努めて下さい。そして貴君はこの点で努力することを恥じてはなりません。たとえ自分に必要ではないと思われることでも、初心に返って始めて下さい。そうすることで、貴君がすでに知っていることでも、アルヌルフスにからしっかりと聞くことでより確実に自分のものにし、また彼の教えによって、もし貴君に間違っている所があるなら、それを改め、また知らなかった知識を増し加えることになるでしょう。

もし彼が何も説明せず、それが貴君の怠惰のためなら、私にとっては残念なことです。私が貴君に望むことは、貴君ができる限り、とりわけウエルギリウス、そして、不道德な響きをもつものは除いて、私が教えなかった他の著作家を十分に読むことです。もし何らかの差し障りがあって彼の授業に出席できないなら、貴君がこれまでに読んだことのある書物、また読むことのできる書物を取り出し、できる時に、すべてを最初から最後まで文法の復習をするように努めて下さい。この手紙を私たちにとって共通の最愛の友人〔アルヌルフス〕にも見せて下さい。ここで、簡単ではありますが、彼が貴君を慈しんでくれることを願い、また彼が貴君に示す友愛が、この私にとっても真の友愛であることを確信させるに足るものであることを切に願います。彼が貴君に示したことは、他ならぬ私の心に示したことなのです。

私と彼との友愛を確信してからすでに久しくなりましたが、私が決してそのことを忘れてはいないことを、彼が思い出してくれたらと思います。できる限りの敬意を込めて、彼に宣しくお伝え下さい。修道院長、私のゴンドルフス師、また貴君と共にいる他の師の方々、兄弟たちにも宜しく。私のこの上なく愛すべき子に、父からの愛情による忠告を軽んじないで下さい。ごきげんよう。

本書簡は、アンセルムスが、ベックにおいてその成長を幼少の頃から見守った修道士マウリティウス（Mauritius）に宛てたものである¹⁰。上述のように、本書簡が執筆されたのは1077年ないし1076年頃、つまりアルヌルフスがカンタ

ベリーの修道院学校に着任してから三、四年経った頃のことである。ランフランクスと共にイングランドに渡ったマウリティウスがアルヌルフスの講義に出席していることを聞いたアンセルムスが、学習の勧めを書き送ったのが本書簡である¹⁷⁾。

「アルヌルフスが文法の教授に秀でていることも聞いています」と述べられているが、修道院学校でのアルヌルフスの職務は、古典古代の著作家の作品を用いて、ラテン語の文法を教授することであった。作品の著者とその内容の解説、個々の言葉の意味、文法的事項について詳細な説明を行なうのが当時の文法教育であり¹⁸⁾、こうした教育を通して、彼はノルマン征服後のイングランドに大陸の知的息吹を吹き込んでいくのである。彼の講義に出席した者の中には、後にアンセルムスの秘書となってその生涯を共にし、アンセルムスの死後に『大司教聖アンセルムスの生涯と生活（アンセルムス伝）』（*De vita et conversatione Anselmi Cantuariensis archiepiscopi*）『イギリスにおける新時代の歴史』（*Historia novorum in Anglia*）を著わしたエアドメルス（Eadmerus Cantuariensis ca. 1060-ca. 1128）もいた。

また、アルヌルフスの重要な仕事の一つは、ランフランクスの指示の下に、修道院の図書館を充実させることであった¹⁹⁾。ランフランクスはノルマン征服以前の貧弱な図書にアウグスティヌス、アンブロシウス、ヒエロニムス、グレゴリウス一世などの教父の著作、教会法の著作、そして古典古代の著作家の作品を加えていった。大陸から書物を取り寄せ、写本を作成する作業は、ランフランクス自身の手でも行なわれたが、中心となったのはアルヌルフスや彼の教育した弟子たちである。本書簡の中でアンセルムスはマウリティウスにウェルギリウスなどの作品を用いて文法の復習をすることを勧めているが、アンセルムスがこのように書き送ることができたのも、こうした作業の賜物である。

本書簡の後半でアンセルムスは「この手紙を私たちにとって共通の最愛の友人〔アルヌルフス〕にも見せて下さい」と述べ、彼との友愛を再確認する言葉

を記している。この書簡から三年ほど経った1079年にアンセルムスは、バック修道院の分院を視察するために英国を訪れる。その際、カンタベリーにも立ち寄り、修道士たちの歓迎を受ける²⁰⁾。つかの間のときとはいえ、アルヌルフスとの再会を果たしたであろうことは想像に難くない。

この後、彼らが再び出会うのは、十三年後の1092年、カンタベリー大司教ランフランクスの後継者としてアンセルムスが英国に渡ったときである。アンセルムスが六〇歳頃、アルヌルフスは五二歳頃のことである。すでに彼は二十年近くの歳月をカンタベリーで過ごし、英国の風土や人々、教会と修道院の事情、そして修道士たちの気質にも十分に通じている。大司教に就任したアンセルムスは、1096年に彼をカンタベリーのクライスト・チャーチの修道院長(prior)に任命する。上述のランフランクスの改革は英国の教会、修道院において諸手を上げて歓迎されていたわけではない。アングロ・サクソン時代の伝統とノルマン征服後の改革との緊張関係の中で、アンセルムスは原則においてはベネディクトゥスの『戒律』に従いつつも、それまでの伝統を考慮した修道院の運営を目指そうとする。その点からすると、アルヌルフスの前任者であったヘンリクス(Henricus 在位 ca. 1074-96)²¹⁾は教会法に厳格に従い、伝統に対しては否定的であった。そこでアンセルムスは、征服王ウィリアム一世を記念して建てられたバトル修道院(Battle Abbey)の修道院長の座が空席になった機会をとらえ、ヘンリクスを同修道院長に任命するよう国王ウィリアム二世(William II Rufus 在位1087-1100)に進言し、代わってアングロ・サクソン時代の伝統の復興に対して理解を示していたアルヌルフスを修道院長に選んだのである²²⁾。こうして、1107年にピーターバラ修道院長となるまでの十一年間、アルヌルフスはカンタベリー大司教アンセルムスのもとでクライスト・チャーチ修道院長を務める。彼ら二人にとってそれは決して平坦な道のりではなかった。

教会の自由と独立を守ろうとするアンセルムスと国王の権力を容赦なく教会

にも介入させようとするウィリアム二世との対立は次第に激化し、1097年、アンセルムスがローマ訪問のためにカンタベリーを出立するや否や、王はカンタベリーを没収する。第一回目の追放である。1100年に王が没し、弟のヘンリー一世（Henry I 在位1100-35）が即位すると、彼は英国に戻る。しかし、叙任権をめぐる問題は依然として解決することなく、1103年から1107年までの四年間、再びアンセルムスは英国を追放される。現在残されているアルヌルフス宛の書簡十五通のうち、上記の『書簡38』を除くと、残りはすべてこの二回目の追放の期間に執筆されたものである。大司教不在の中で、アルヌルフスの上にはさまざまな難題が襲いかかってくる。彼はそれらをアンセルムスに報告し、助言と判断を仰ぎ、アンセルムスがそれに答える。そのうちの一通を紹介しよう。これは1104年8月、リヨンからアンセルムスがアルヌルフス（エルヌルフス）に出したものである。

3. 『書簡331』（カンタベリー修道院長アルヌルフス）

『書簡331』カンタベリー修道院長エルヌルフスへ

大司教アンセルムスより。敬愛する修道院長エルヌルフス師に、挨拶と神の祝福、そしてできることなら、大司教としての祝福を送る。

敬愛のこもった貴君の手紙を頂きました。私の事に関する慎重なご助言と好意的なご配慮、誠実な愛情による思い遣り、そして貴兄の心と私たちの教会を悩ます様々な困難に対する嘆きに満ちたお手紙でした。さて、助言して下さったことの一部についてはそいかねます。というのも、エヴェラルドゥス師が私のもとに到着しなかったので、聖ミカエルの祝日にちょうどイングランドに戻ることができないからです。けれども、他のことについては、もし実行できるなら、神の援けによって、助言して下さったとおりにするつもりです。すでに申しましたように、ご配慮と愛情に対し、神と貴兄には感謝いたします。しかし、様々な困難については、私の慰めと力によって和らげることのできるよう

なことを除けば、貴兄は私の慰めを必要とはなさらないでしょう。というのも、私たちが数多くの艱難と水と火を通して安らぎに至る〔詩65：12，使14：22〕ということはご存知だからです。他の多くのことについては、貴兄の賢慮によって解決できないことはなく、それどころか、それらは艱難にあって喜びなさいと励ましているのです。神の慰めによって貴兄が実行し、最後までやり遂げることを疑ってはおりません。

私の返答を望んでおられることについて、まず最初に、ヨーク大司教とロンドン司教とでなされた合意は、カンタベリー大司教を抜きにして確立され、執行されてはならないということを申しておきます。というのも、たとえカンタベリー司教の座が空席であっても、その席がうまるのを待つべきだからです。そこで、もしこの合意に基づいて何事かがなされたとしたら、それは有効と認めてはならず、私もそれを無効とします。

副長たちや総務長によって被った損害については、過ぎたことですから、助言はできません。しかし、何らかの手だてを講じて損害を取り戻すことができるならば、それは喜ばしいことです。副長の一団への貴兄の忠告については追認することになるでしょう。ゴデフリドゥスについては、貴兄とロチェスター司教に忠告しました命じます。彼は公正に取り扱われるべきであって、王やその他の人々の前であなたがたを非難して自分が不当に処遇されたと不満を訴えることがないようにして下さい。彼があなたがたから借りているものについては合法的に賠償するなり、あるいはあなたがたから借りている屋敷については返却すべきです。ヨセフ師については、上述の司教に、もし必要なら貴兄を助け、彼が貴兄の配慮によって所有している負債と土地について貴兄と協議することができるよう計らってもらいたいと命じておきましたが、このことはご高配に委ねます。

少年と若者を受け入れることについては、貴兄が書いてこられた数多くの理由はもっともですから、ご判断にはまったく賛成します。神の御計らいによ

て私が戻ったあかつきには、このことも含め他のことについても相談しましょう。しかし、私がどこにしようとも、次のことは守って欲しいと思いますし、またそのようにお願いします。すなわち、こうした年齢の者を受け入れる場合には、何よりもまず許可を与えられた者が受け入れられるようにして下さい。ある人々が私と貴兄を非難していること、つまり私たちの教会の人々に関しては、なぜそうなったかはご存知のとおりです。私たちが喜んで受け入れた者以外には、私たちのもとに来る者はほとんどありません。すでに受け入れた俗人については、神が憐れみからそのように計らって下さったことです。貴兄が彼とその友人たちに慈愛を示して下さったので、彼は善い最後の安らぎを得たのです。神がすべての罪から彼を解き放って下さるように。神が慈しみからあなたがたのもとに遣わしたボーヴェーの司祭については、喜ばしいことです。この世の栄光を軽蔑すること、人生の不確かさ、この世から去っていく魂がこの世への愛着のために遭遇する危険について貴兄と度々語り合うことによって、彼が陶冶されるように勧めます。もちろん、何らかの仕方ではなされていることと思いますが。すでに受け入れたロンドンの司祭については、なされたことを承認します。貧者のための奉仕者、ロベルトゥスについては、仰るとおりにして下さい。というのも、彼が健康を回復したなら、その魂の健康のためには何らかの教会への奉仕が有益だと信じるからです。しかし、もし彼が死ぬのなら、救われるでしょう。ライミンジのロベルトゥスについての私の意見はこうです。もしこの者がこの時期に修道士となったのであれば、彼の妻には、生きている限り、彼が私から借りている土地を許可します。しかし、誰かがこの借地をカンタベリー大司教、すなわち、私ないし教会法に従って私の後任となる者以外から受領するなら、私は彼に破門を破門を下すこともできるし、また彼の上に神の怒が下るようにと願うこともできます。だが、彼がいつ修道生活に入ろうと、あるいは修道生活に入ることなく生涯を終えようと、借地については私の述べたことが有効です。

規律を破って修道院から出て行き、神の定めによって連れ戻された兄弟たちについては貴兄が処理なさったことをすべて賞賛します。また残留した者たちについては、もし彼らが善い意志からそうしたのなら、神に感謝します。けれども、どのようにしても矯正不可能と認められた者は、その邪悪な性質のゆえに悪魔に引き渡された者だと私は考えますので [1 コリ 5 : 5]、もはやあなたがたの交わりに受け入れるべきではないと思います。民衆が愚かにも貴兄に浴びせた悪評については、貴兄の知恵によって慰められるべきです。ある人々が修道院から逃亡する場合、彼らはより優れた生活を求めているのではなく、むしろ自分たちに求められている善い修道生活に耐えられないのですから、それは修道院にとって悪評ではなく賛辞となります。

コルネリウス師が彼の父について私に問い合せてきましたが、ご存知のように、私も貴兄も受け入れの希望を表明しています。彼を受け入れることが、貴兄に良いと思われるなら、私もそれで良いと思います。彼は聖なる修道生活への愛のゆえに遙か遠くから一人でやって来て、しかもすでにかなりの老年に達しているからです。

去らせた女たちのもとに再び戻った司祭たちについては、私たちの尊敬する師父リヨン大司教から助言を頂きました。彼は、この者たちがなおも教会に入ることを許すようにとは決して言わず、むしろ、幼児には誰か他の聖職者ないし俗人が洗礼を施すようにと助言しました。のみならず、他の必要性、たとえばしばしば起きる聖職者の不在といった場合でも、受け入れることを推奨していません。にもかかわらず、私が述べたこと、また貴兄が必要だと思うことを考慮し、そして司教の助言を認めた上で、私がいるのと同じように、貴兄の助言を行なって下さい。

貴兄が私に書いてこられた祝日の祝いについては、貴兄の裁量に委ねます。貴兄の決定を、有効であると追認します。神の母、聖マリア誕生の八日間の祝日についても、私たちの兄弟たちの多くが私たちの教会でも執り行なわれるこ

とを求めており、多くの教会でも行なわれているのですから、同様に適切と思われるなら執り行なって下さい。

私たちの愛する子、修道士ロベルトゥス師について、彼はいつもわれわれの財産を守ってくれていますが、もし彼にその力があるならば、私と共にいる聖職者ロベルトゥスに、彼がカンタベリーに所有している家を——ロゲルス・プンテルが現在住んでいるような閑静な家——所有することを許可してくれるよう貴兄から伝えて下さい。

貴兄が被っている困難を共に苦しみ、また貴兄のために祈ってくれるようにと願っておられますが、両方ともご要望のとおりにいたします。そして貴兄も同じようにして下さっていることは承知しています。全能の神が常にあなたがたに慰めを与えて下さるように。

国王の返事が、指定の期日までに司教に与えられないなら、できるだけ速やかにそれを要求すべきであることを伝えました。また、それをライミンジのヴルガルスと彼の同僚を通すか、他の二人の使いによって私のもとに届けて欲しいと伝えておきました。エヴェラルドゥス師では速やかにいかないからです。

最初にアンセルムスは、自分が聖ミカエルの祝日（9月29日）までに英国に帰還することができなくなった事情を述べ、ついで困難の中にあるアルヌルフに慰めと励ましの言葉を綴った上で、個々の具体的な問題について指示と助言を与える。ヨーク大司教、ロンドン司教そしてカンタベリー司教座の関係、修道院の財産の管理と貸借、修道士の受け入れ、逃亡した修道士の処分、修道院で生涯の最後を迎えようとする者の受け入れ、妻帯司祭の処分と秘蹟の執行権の問題、祝日の問題等々、ここで一つ一つを論じる余裕はないので、以下では二つのことだけを取り上げることにするが、どれをとっても当時の英国の教会、修道院の事情を理解する上で重要な問題ばかりである。

こうした中で、「神が慈しみからあなたがたのもとに遣わしたボーヴェーの

司祭については、喜ばしいことです」 という一節は注目を引く。生まれ故郷のボーヴェーを離れ、英国での生活が三十年にもなるアルヌルフスにとって、ボーヴェーの司祭がカンタベリー修道院を訪れてきたことは喜ばしいことであり、慰めでもあったに違いない。その司祭と霊的な語らいをするように勧めるアンセルムスの筆致にアルヌルフスへの思い遣りを感じ取ることはできないだろうか。

次に述べておきたいのは、妻帯司祭の問題である。これを単に聖職者の風紀の乱脈ととるべきか、あるいはアングロ・サクソン時代の慣習の残滓と考えるべきかは難しいが⁽²³⁾、いずれにせよ、ノルマン征服後の英国においてはグレゴリウス改革の導入により、聖職者の妻帯が禁じられている⁽²⁴⁾。にもかかわらず妻帯生活を続けている者について、アンセルムスは、彼らを再度教会に受け入れてはならず、何らかの事情で聖職者が不在の場合でも、彼らが幼児洗礼を施すことを許可すべきではなく、他の聖職者ないし俗人が幼児洗礼を施すように⁽²⁵⁾、というリヨン大司教フゴー（Hugo ca. 1040-1106）の断固とした見解を記す。しかし、アンセルムスはこのフゴーの見解をそのまま当該の問題に適用すべきであるとは述べていない。個々の場合にどう対処するかはアルヌルフスの実際の判断に委ね、また彼の判断に全面的に信頼しているのである。

同じことは次の典礼の問題に関しても言うことができよう。ランフランクス改革により、アングロ・サクソン時代に行われてきた諸祝日がカンタベリーの教会暦から取り除かれる。しかし、伝統の復活を希望する声は後を絶たない。「貴兄が私に書いてこられた祝日の祝いについては、貴兄の裁量に委ねます。貴兄の決定を、有効であると追認します。神の母、聖マリア誕生の八日間の祝日についても、私たちの兄弟たちの多くが私たちの教会でも執り行なわれることを求めており、多くの教会でも行なわれているのですから、同様に適切と思われるなら執り行なって下さい」。英国の教会、修道院の霊性を熟知し、また伝統の復興に好意的なアルヌルフスだからこそ、アンセルムスは安心してこう

書き送ることができたのである。

本書簡の最後に、アンセルムスは帰還を許可する国王の手紙ができるだけ速やかに自分の手元に到着するよう願っている。しかし、彼の英国帰還が実現するのは二年後のことである。その間、アルヌルフスは一時病を得て床に伏す。1105年の7月ないし8月にベックからアルヌルフスとカンタベリーの修道士に宛てて出した『書簡364』において、アンセルムスは、同年の7月22日にレーグル (l'Aigle) でなされた国王ヘンリー一世との和解を報告し、その末尾で「あなたがたが書き送って下さったとおり、修道院長が病気から回復したことを、神に感謝いたします。そして、完全に健康を取り戻すことができますように神に祈ります」⁽²⁶⁾と述べている。アルヌルフス宛の最後の書簡は、同年ないしその翌年にベックから出された『書簡380』である。以後、アンセルムスからアルヌルフスに宛てた書簡は残されていない。そして、1106年9月に彼は英国の土を踏む。

4. 結 語

アンセルムスが帰国した翌年、アルヌルフスはピーターバラ修道院の院長となってカンタベリーを去る。ピーターバラでも彼は修道士および修道院外の人々の深い信頼そして国王の寵愛を得て院長としての務めを果たしていたが、ある日、王に呼び出され、ロチェスター司教区に赴くようにと命じられる。抵抗する彼に対し、王は彼をカンタベリーに連れて来るよう大司教に命じ、司教として祝別する。1114年9月15日のことである。このことを聞いたピーターバラの修道士たちの悲嘆はかつてないほどであった、と年代記の記者は記している⁽²⁷⁾。

1124年2月15日、アルヌルフスはその生涯を開じる。ロチェスター時代についてはあまり多くのことは知られていない⁽²⁸⁾。しかし、『ロチェスター・テキスト』(*Textus Roffensis*) と呼ばれる古い英国法の編纂に彼が関係したであろ

うことは研究者が認めることである⁽²⁹⁾。ランフランクス、アンセルムスという偉大な大司教の下でカンタベリーのクライスト・チャーチ修道院で教え、同修道院長を務め、さらにピーターバラ修道院長、ロチェスター司教を務めた「賢慮をもった敬虔な人」アルヌルフスは、その生涯の終りに至るまで英国の伝統を尊重しその復興に協力的であった。最後に、アングロ・サクソン時代の英国とその教会の典礼に強い郷愁の念を抱いていたエアドメルスが、「聖母マリアの御やどりの祝日」(12月8日)を祝う慣習の復興を支持して『聖母マリアの御やどりについて』(*De conceptione sanctae Mariae*)を執筆したのは、アルヌルフスの死んだ翌年であったことを付け加えておく⁽³⁰⁾。

注(1) 以下テキストは、*S. Anselmi archiepiscopi Opera Omnia* tomus secundus. Ad fidem codicum recensuit Franciscus Salesius Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1968に拠る。アンセルムスの書簡の近代語による翻訳としては、W. フローリッヒによる全訳、*The Letters of Saint Anselm of Canterbury*; translated and annotated with an Introduction by Walter Fröhlich (Cistercian Studies Series 96, 97, 142), Kalamazoo 1990, 1993, 1994、選訳には、*Cur Deus Homo by St. Anselm to which is added A Selection from his Letters*, Edinburgh 1909. *Lettres spirituelles choisies de Saint Anselme*, traduites par les moniales de monastère de Ste-Croix, Paris/Abbaye de Maredsous 1926がある。

なお、アルヌルフスの表記についてはエルヌルフスもあるが、本稿ではアルヌルフスで統一する。

(2) Cf. Dictionaire Théologie Catholique, t. 1, col. 1989; Lexikon für Theologie und Kirche, Bd. I, col. 899.

(3) Cf. *Ep. LXXVIII (P. L., CLXII, col., 99-100)*。なお、イヴォがベックの修道院学校においてランフランクスの下で学んだという12世紀の年代記者の証言 ('Hic dum esset juvenis audivit magistrum Lanfrancum, priorem Becci, de secularibus et divinis litteris tractatam in illa scola quam Becci tenuit' *The Chronicle of Robert of Torigni*, ed. R. Howlett, in *Chronicles of the reigns of Stephen, Henry II and Richard I, Rolls Series*, London, 1889, vol. 4, p. 100) については疑問視されているが、サザーンはこの証言を信頼すべきだとしている (cf. R. W. M. Southern, *Scholastic Humanism and the Unification of Europe*, Blackwell, 1995, vol.1, pp. 252-3)。M. ギブソンはこの点については断定を避けているが、他方、アルヌルフスがイングランドに渡る頃、イヴォがボーヴェで教えていたことを指摘する (cf. M. Gibson, *Lanfranc of Bec*, Oxford, 1978, pp.36-37.)。なおイヴォの生涯については、cf. Yves de Chartres, *Prologue*, Texte latin, introduction, traduction et notes par J. Werckmeister (Sources Canoniques 1) Paris 1997, pp. 13-20. 簡潔だが、最近の研究を踏まえて書かれている。

(4) *Ep. 38, 286, 289, 291, 292, 295, 307, 311, 331, 349, 357, 364, 374, 376, 380*。このうち、*Ep. 38*の表題は、*Ad ARNULFUM monachos*, *Ep. 286, 289, 291, 292, 295, 349, 364, 376*は、*Ad ERNULFUM priorem et monachos Cantuarienses*, *Ep. 307, 311, 357*は、*Ad ERNULFUM priorem Cantuariensem*,

Ep.374は、Ad GUNDULFUM episcopum Rofensem ERNULFUM priorem WILLELMUM archidiaconum Cantuarienses, Ep.380は、Ad ERNULFUM priorem et WILLELMUM archidiaconum Cantuariensesとなっている。つまり、最初の書簡を除くと、すべてアンセルムスがカンタベリー大司教、アルヌルフスがカンタベリー修道院長であった時代に書かれたものである。最後の書簡 Ep. 380は、1105/6年、つまりアルヌルフスがピーターバラの修道院長になる前年に執筆されたものである。また以上の書簡の他にアルヌルフスに言及する書簡としては、Ep. 64, 182, 306, 308, 312, 328, 330, 332, 335, 355, 359がある。アルヌルフスからアンセルムスに宛てた書簡としては、Ep. 310がそれかも知れない。

- (5) アルヌルフスにしても、シャルトルのイヴォにしてもボーヴェーからベックに来るものは少なからずいたようである。アンセルムスが修道院長であったときには、ボーヴェーの聖堂の会計係り (thesaurarius) であったロドウルフス (Rodulfus) がベックの修道士となっている。cf. Ep. 99; 115, 37; 117, 56-62.
- (6) Cf. *Benedicti Regula*, c. LVIII, 17; I, 10-11.
- (7) 本書簡の翻訳は、『中世思想原典集成10 修道院神学』矢内義顕監修 平凡社 1997年 pp. 59-67に収録されている。
- (8) Cf. *op. cit.*, p. 42.
- (9) Cf. M. Gibson, *op. cit.*, pp. 162-190.
- (10) Cf. Ep. 37, 54-74. (前掲邦訳 pp. 64-5)
- (11) Cf. *Benedicti Regula*, c. I, 2; III, 4-8; IV, 60; VII, 19-22 etc.
- (12) ここでアンセルムスはアルヌルフスに「貴兄が他の人々に役立つような、あるいは他の人々に教えるような場所ではなく」(nec locum ubi vos aliis prodesse aliosque instruere) と述べている。かつてアンセルムスが修道士となるべきか否かと苦悩したとき、彼の胸中に浮かんだ選択肢の一つが「自分の学識を開陳し、他の人々に役立つことができるような場所」(in quo et scire meum possim ostendere, et multis prodesse) に行くべきではないか、ということであった (*Vita Anselmi*, I, I, c. v)。しかし、熟慮の末、彼はベックの修道士となった。
- (13) 世俗の学校と修道院学校、スコラ学と修道院神学について、詳しくは、前掲『中世思想原典集成10 修道院神学』の解説・参考文献 (pp. 8-28) および『中世思想原典集成7 前期スコラ学』古田暁監修 平凡社 1996年の解説・参考文献 (pp. 8-25) を参照されたい。
- (14) この点で、M. ギブソンがボーヴェーについて、'Beauvais, the city of Ivo of Chartres and Roscelin, is one of the dimly-perceived centres of contemporary scholarship, that should be compared with Laon and Paris rather than with Bec.' (*op. cit.*, p. 177) と述べている点は注目すべきである。なお、ロスケリヌスとボーヴェーとの関係については、cf. C. J. Mews, 'St Anselm, Roscelin and the See of Beauvais' in *Anselm Aosta, Bec and Canterbury*, ed. D. E. Luscombe & G. R. Evans, Sheffield Academic Press 1996, pp. 106-119.
- (15) Cf. R.W. Southern, *Saint Anselm and his Biographer*, Cambridge 1966, p. 269; M. Gibson, *op. cit.*, p. 176.
- (16) マウリティウス宛の書簡は、本書簡を含めて十通残されており (Ep. 42, 43, 47, 51, 60, 64, 69, 74, 79, 97) また、その他の書簡においても、しばしば彼の名が登場する (Ep. 32, 33, 34, 35, 36, 40, 44, 58, 72, 104, 147)。
- (17) 本書簡で度々使用される 'legere ab aliquo', 'declinare', 'declinatio' という表現については、cf. J. Leclercq, *L'amour des lettres et désir de dieu*, Paris 1956, pp. 116-7; R.W. Southern, *The Life of St Anselm by Eadmer*, Oxford 1962, p. 8, n. 3.

- (18) こうした文法教育は古代の学校からの伝統である。この点については、cf. H. I. マルー『古代教育文化史』横尾壮英 他訳 岩波書店 1985年 pp. 331-41。また修道院学校での古典の学習については、cf. J. Leclercq, *op. cit.*, pp. 108-41。
- (19) Cf. R. W. Southern, *op. cit.*, 1966, pp. 242-5, 267-8; M. Gibson, *op. cit.*, pp. 177-82。
- (20) Cf. *Vita Anselmi*, l. I, c. xxix。
- (21) ヘンリクス宛の書簡は十三通残されている (*Ep.* 5, 17, 24, 33, 40, 50, 58, 63, 67, 73, 93, 140, 182)。最後の書簡以外は、すべてアンセルムスがベックに在る時代に書かれたものである。アンセルムスとヘンリクスについては機会を改めて論じなければならない。
- (22) Cf. R. W. Southern, *Saint Anselm A Portrait in A Landscape*, Cambridge 1990, pp. 322-3。
- (23) たとえば、12世紀のリヴォーのアエルレドウス (Aelredus Rievallensis 1110-67) の家系は、10世紀末からダラムで聖クスベルト (Cuthbert ca. 634-87) の聖遺物を管理する司祭であった。彼の父エイラフ (Eilaf) はグレゴリウス改革の導入により、その職を辞し、晩年を修道院で迎える。
- (24) Cf. Eadmerus, *Historia Novorum in Anglia*, p. 142
- (25) 聖職者不在の場合に誰が幼児洗礼を執行すべきかは、しばしば問題となつたらしく、ランフランクスもその『書簡46』において「教会法の命じるところでは、洗礼を受けていない幼児に死が差し迫り、司教が不在の場合には、信仰の篤い俗人の手で洗礼が施されることが出来ます」と述べている (テキストは、*The Letters of Lanfranc of Canterbury*, ed. and tr., by Helen Clover and Margaret Gibson, Oxford 1979, pp. 154-60。邦訳は、前掲『修道院神学』pp. 54-8 所収)。
- (26) *Ep.* 364, 41-3。
- (27) Cf. *The Anglo-Saxon Chronicle*, tr., and ed., Michael Swanton, London 1996, E1114 (p. 245)。なお、アルヌルフス自身もカンタベリーとピーターバラ時代に、この『アングロ・サクソン年代記』の記録の継続に関係したかも知れない (cf. R. W. Southern, *op. cit.*, 1966 p. 270; 1990 p. 323.)。12世紀初頭のピーターバラ修道院については、cf. D. Knowles, *The Monastic Order in England*, Cambridge, 1963 pp. 182-3。
- (28) Cf. D. Knowles, *op. cit.*, p. 177。
- (29) Cf. R. W. Southern, *op. cit.*, 1966 p. 270; 1990 p. 323.; M. Swanton, *op. cit.*, p. 245 n. 13。
- 本稿では、アルヌルフスの神学的思索について言及することができなかった。神学的著作として残されているものは、『汚れた結婚に関する書簡』 (*Epistola de incestis nuptiis P. L.*, CLXIII, col. 1457-74) および『教会の秘蹟に関するランベルトウスの様々な質問への返信』 (*Responsum ad varias Lamberti quaestiones de sacramento Eucharistiae*, D'Achery, *Spicilegium* III, pp. 470-74) がある。後者は聖餐論を取り扱ったもので (cf. A. J. MacDonald, *Berenger and Reform of Sacramental Doctrine*, London, 1930 pp. 375-6; R. W. Southern, *op. cit.*, 1966 p. 269), 興味深いテーマであるが、機会を改めて論じることにした。
- (30) 邦訳は前掲『修道院神学』pp. 68-98に収録されている。

(本稿は1998年度特定課題研究助成費の成果の一部である。)